

ひまわりの海に囲まれた小さな村の音楽祭

～南仏ラングドック地方での国際交流を通して～

校長 鎌田 直純

長い夏休みが終わり、子どもたちは学校では得られない体験を通して一まわりたくましくなったことでしょう。目を輝かせてお友達と夏休みの思い出を語り合うことも新学期の楽しみの一つだと思います。

私は7月にフランスへ演奏旅行に出かけました。都会での生活を避けて、生まれ故郷で作曲活動をしたセヴラックという作曲家の音楽祭に招聘されたからです。セヴラックの音楽は派手な誇張はないものの、その香り高く温かい作風で近年注目されています。演奏旅行で訪れたのは、カタルーニャの小都市セレ、そして、音楽祭の行われているピレネー山麓の小さな村サン・フェリックス=ロラゲ、そしてパリの国際大学都市にある日本館の三カ所です。ピアニスト館野泉さんとともに16人の演奏家が、セヴラックのオペラ作品の抜粋や歌曲、日本の現代曲などを演奏しました。

セレはカタルーニャ地方の美しい小都市です。セヴラックが晩年過ごした場所で、ピカソもゆかりの地です。その街の楽器博物館附属のホールで演奏しました。演奏会の前に交流の会が催され、地元の関係者がボランティアで作ってくれたガスパッチョなど郷土料理に舌鼓を打ちました。

周りにひまわり畑が海のように広がるサン・フェリックス=ロラゲは、スペイン寄りの南仏ラングドック地方にある、セヴラックの生誕地です。旧葡萄酒倉庫の中を利用した会場で演奏会は行われました。演奏会の後はそこでパエリャと葡萄酒がふるまわれ、村人達との暖かい交流があり、セヴラックを愛する当地の人たちと、楽しい時を過ごしました。

パリの会場の国際大学都市は、色々な国の研究者や留学生が滞在するために、各国が施設を作り運営しています。その中にある日本館は、大きな藤田嗣治の絵が大サロンの舞台を飾っており、その前で演奏しました。実は私はパリに留学していた時期に、何度か演奏したことがあります。素晴らしい絵画と一体となって演奏する快感は格別です。こちらでも終わった後はレセプションが催されて観客との交流が有りました。

今回の訪仏は何年も前から準備され、世界の全地域において総合的に国際文化交流事業を実施する日本で唯一の専門機関である国際交流基金や、民間機関ではありますが、日仏の様々な分野での交流をより活発に行う目的で設立された笹川日仏財団の助成を受けることが出来ました。プロジェクトの趣旨が日仏の文化交流として、とても評価されたからです。サン・フェリックス=ロラゲは若い人が都会に流出して、過疎に悩んでいます。村人にはセヴラックを通して村を広く知って欲しいという希望があります。私たちが遠い異国の

日本から訪れて、彼らの誇りであるセヴラックの音楽を演奏し、また日本の現代の音楽作品を演奏したことは、想像以上の驚きと喜びを与えたようです。国際交流は言葉で言うほどたやすいものではありませんが、それぞれの国の文化や歴史を理解して尊敬することから始まるのではないかと改めて実感しました。ただ単に外国語を学ぶのではなく、相手の国の文化を深く理解し、また私たちも、伝統文化と共に現代に生きる私たちの文化を知ってもらう努力が大切です。皆さんもよくご存じのように、附属大泉小学校も特に国際交流に力を入れている学校です。皆でいろいろな方向から国際交流のあり方をこれからも研究していきたいと思います。